

イジワル上司の甘く艶めく求愛

第一章

朝川^{あさかわ}ホールディングスの三十階建てビルのロビーは、いつもよりも混み合っていた。六基あるエレベーターに新入社員と思われる真新しいスーツを着た若者たちが続々と乗り込んでいる。

どこに配属されたという話題で盛り上がり、和^わ気^き藹^{あい}々^{あい}と楽しそうだ。

きつと、会議室で行われる研修に行くのだろう。自分も入社した年の春に受けたと思います。

(次のに乗れるといいけど……)

凜^{りん}はエレベーターを待ちながら腕時計を見て、ため息をついた。

すると、隣にいる男性と肩がぶつかってしまう。頭を下げると、新入社員であろう男性がちらりと視線を向け、話しかけてきた。

「君はこの配属になったの？」

「え……？」

凜は肩の下まで伸びた黒髪を後ろで一つに結んでいる。さらに、量販店で購入した地味なグレーのスーツに身を包み、ブラウスのボタンを一番上まできっちり留めているため、新入社員と思われるらしい。

立っている位置も悪かった。

エレベーター待ちの新社員に周囲を囲まれる形で埋もれているのだ。

(地味すぎるのかな……二十八歳にもなつて)

線が細く薄化粧を施した凛の容貌は、儼然とした印象を見る人に与える。近くで見れば顔立ちが整っているとわかるものの、顔を隠すように斜めに垂らした前髪のせいかな、どこか野暮ったく見えてしまう。昔からよく言われたのは、目立たない、影が薄い、の二つ。

謝られても微妙だと、凛は曖昧に笑っておく。男性はすでに凛に興味を失っていて、別の女性に話しかけていた。

エレベーターに乗り込み、目的階を押す。そこで凛が新社員ではないと気づいたのか、先ほどの男性が気まずそうに頭を下げた。

(ああ、もうエレベーター早く動いて、遅刻しちゃう)

いつもより会社に着くのが遅くなってしまったため、気が急いでいた。エレベーターがようやく目的の階で停まり、凛は足早にデスクへ向かう。

「おはようございます」

始業時間になんとか間に合い、ほっと席に着いた。

「高嶋さん、おはよう。珍しいね、いつももっと早いのに」

隣の席から男性社員に声をかけられて、急いでパソコンを立ち上げながら返事をした。

「電車が十分ほど遅れていて……遅くなつてすみません」

「いや、遅刻じゃないし……ああ、だからまだみんな来ないのか」

男性社員は周囲を見回して言った。あと五分ほどで始業時間になるというのに、法務部の社員はまだ半数ほどしか揃っていない。凛が壁際のデスクに視線を向けると、専務である朝川はすでに席に着いていた。

(専務は車通勤だったわけ。だから影響なかったのかな)

バッグをデスクの一番下の引き出しにしまい、グレーのジャケットを椅子の背もたれへかけた。パソコンを立ち上げ今日のタスクをチェックしていると、デスクの内線が鳴る。凛は一呼吸置いてから受話器を取った。

「はい、法務部高嶋です」

『お疲れ様です。取引先相談窓口チームの藤本です。今、お時間よろしいでしょうか?』

「お疲れ様です。はい、大丈夫です」

内線が同期の藤本智也からだとなり、凛は肩の力を抜いた。

入社して六年目。しかし法務部に配属されてからこの四月でまだ一年だ。この部署にかかってくる電話のほとんどが契約書や法律に関係する内容のため、勉強中の凛にはすぐに返事ができないことも多く、まだに緊張する。

内線にさえびくびくしてしまうのは、小心者の性格のせいかもしれないが。

『ドマーニの近隣にあるスーパールから、匿名でうちの窓口に通報があったんだ』

電話口に出たのが凛だとわかり、智也もまた口調を崩して話した。

凜が働く朝川ホールディングスは小売り事業を中心とし、全国展開する総合スーパーマーケット『ドマーニ』を子会社に持つ巨大企業だ。ちなみにドマーニという名前はイタリア語で明日という意味から、今日も明日もずっと地域に根づくスーパーというコンセプトでつけられたらしい。

法務部は、取引先との契約締結に法律上の問題がないかの確認や、就業規則などの社内規定の確認、それにグループ会社全体の従業員や取引先からの相談事を、法律に則り解決するのがおまな仕事だ。凜は現在、その相談事に関する仕事に携わっていた。

智也の所属する取引先相談窓口チームは、内部や外部からの通報に対応している。通報というと不穏な響きだが、内容は従業員の働き方についてのクレームや、万引きの相談など多岐にわたる。お客様相談窓口とは違い、通報者はグループ会社の従業員が多い。

その内容を精査し、法律に関する相談は法務部へ回されるのだ。凜はおもにこのチームからの連絡を受け、動いていた。

もともと法律に明るくない凜は、勤続六年目ではあるものの新人と変わりがない。そのため、専務である朝川の補佐として働いている。

彼は大学在学中の司法試験合格者らしく、三十二歳という若さでその地位にいるのも納得できる聡明な男だ。

「匿名で外部通報ね」

『ああ、メール転送したから』

「うん。ちょっと待って」

法務部に異動になってから、こうして智也と話す回数が格段に増えた。仕事に私情を持ち込んでほならないとわかつてはいるが、片思いの相手と少しでも多く話せるのは嬉しかった。声が弾んでしまうのは仕方ないだろう。

智也からのメールには『ドマーニA店では、集客のため格安に仕入れた商品を原価割れで販売している』とあった。近隣のスーパーの通報者は通報に迷いがあつたらしく、大事にするつもりはないが毎日のように原価割れで販売されてしまうと、うちは勝ち目がないといった内容が書かれていた。

企業内で発生した問題に対し通報があつた場合、事業者は一定期間内に調査、是正をしなければならぬ。そしてそれを理由に通報者を不当に扱ってはならないと、公益通報者保護法によって定められている。これは至急調査しないといけない案件だろう。

『至急で頼める？』

「じゃあ、専務に確認を取って、現場に適正価格にするよう通達を出すから。放置すれば公正取引委員会の調査が入る可能性があるかもしれないし」

調べると、通報があつた地域はスーパー激戦区と言われているところだった。歩いて十分ぐらいの範囲にドマーニを含めた三件のスーパーがある。

『ああ、よろしく。あとさ、今夜いつもの店はどう？ 凜に話があるんだ』

「話？」

『会ってから話すよ』

思わせぶりの言い方に凜の胸が高鳴るが、無理やりそれを押し止める。

「うん、いいよ……舞は？」

智也と同じ取引先相談窓口チームにいる青木舞も凜の同期だ。舞とは新入社員時代、同じ受付に配属されたことで仲良くなった。

受付業務が自分に合っていたとは言いがたい。凜は毎日、緊張しすぎて慌ててばかりいた。社交的な舞が何度も助けてくれたおかげで勤められたようなものだ。

引っ込み思案で人と話すのが苦手だった凜に、智也を紹介してくれたのも舞だ。以来、三人でよく食事に行っている。

いつもは舞から連絡が来るため、智也から食事に誘ってもらったのは初めてだ。

『今日は……舞は誘ってないんだ。二人でもいいか？』

智也の声はなぜか決まりが悪そうで、感情を必死に押し殺しているように聞こえた。本当なら今すぐ話したい。でも話せない。そんな気配が電話越しに伝わってくる。

(話ってなんだろう？)

気になるものの、夜になればわかるかと凜は頷く。

「もちろん大丈夫。智也は定時で終わりそう？」

『たぶんね。凜は？』

「私も平気」

急ぎの契約が入らない限り、法務部の残業はさほど多くない。朝川が無駄な残業をしない主義の

ため、部下もそれに倣っている。おそらく今日も定時に帰れるだろう。

まだ仕事は始まったばかりなのに、すでに気持ちは智也との食事に向いている。

舞から智也を紹介されたのは、入社して一ヶ月ほど経った頃だったと思う。同期と言っても人数が多いため、凜は研修で同じ班になった数人と言葉を交わす程度だった。智也の顔と名前は知っている、それまで話す機会はなかった。

智也はいわゆるイケメンとは違いかもしれないが、笑った時に細くなる目や口元のえくぼがチャームリングで優しそうな容姿をしている。

進んで前に出る方ではなくとも、話し方が穏やかだからか一緒にいるとても落ち着いた。

毎日こつこつ仕事に励む姿勢や真面目さが自分と似ているような気がして、凜は出会ってすぐに彼を好きになった。それから六年近くも片思い中である。

智也に気持ちを告げるつもりはなかった。片思いは楽しいし、このままずっと同じようにはいなくとも、今の関係で十分満足している。

『じゃあ、仕事終わったら連絡する』

「うん、よかった」

凜は、浮かれそうになる気持ちをなんとか抑えて冷静に返した。『じゃあ、あとで』と智也が電話を切ったのを確認し、音を立てないようにそっと受話器を置く。

朝川の席へ視線を走らせ声をかけるタイミングを計る。今ならいいだろうか。

「朝川専務」

凜が呼びかけると、朝川は返事をせずに視線だけを向けてくる。朝川の人を寄せつけない雰囲気
に怯（ひる）みそうになる。

癖なのか、いつも眉間にしわを寄せているため目つきが悪く見えるものの、それがまったくマイ
ナスになっていないのは、日本人離れた美貌のせいだろう。三十二歳にして威厳がありすぎるの
ではないかと感じるほど、朝川は精悍（せいけん）な顔立ちをしていた。

鋭い眼光に高い鼻梁（びりょう）、無駄な肉のないシャープな輪郭、どれを取っても完璧だ。艶（つや）のある黒髪は
左右に分けられ、耳のすぐ上で切り揃えられている。

ブランド物に詳しい姉、蘭（らん）のおかげで、興味はないが知識だけは持ち合わせている凜が見ても、
朝川の着ているスーツはいつも一級品。時計や靴といった小物のセレクトも、姉に言わせればおよそ
らく百点満点どころか二百点超えといったところだろう。

（みんなはかっこいいって言うけど、私はちよつと苦手なんだよね……）

無愛想で誰に対しても淡淡々としているのは怒っているわけではない。それはこの一年でわかった。
朝川が仕事中に感情を露（あらわ）にすることは滅多にない。笑いもしないし、怒りもしない。だが、自
分が優秀な分、他人にも同じレベルを求める男だった。彼についていく部下はいつも胃をキリキリ
させている。

補佐である凜への指導は特に厳しく、物言いも冷たい。小心者で心配性の凜は、彼のそばにいる
といつも緊張で肩が凝（こ）ってしまうのだ。

仕事ができるのは間違いないし、彼から学ぶべきところも多い。指示は的確で、上司として尊敬

できるのはたしかなのだが。

「あの……今、お時間よろしいですか？」

「ああ」

朝川が素つ気ない口調で答えた。声が低いのはいつもと同じだ。朝川が話したすと法務部の社員
全員が一瞬手を止め、耳を澄ませる。彼の声はそれだけよく通るのだ。

「取引先相談窓口チームからの連絡で、ある店舗が原価割れで商品を販売しているようです。至急、
対応を求められているのですが」

「不当販売か？」

「はい、そのようです。大量発注の確認が取れておりますので」
不当販売とは独占禁止法で禁止されている取引方法の一つだ。

たとえば賞味期限切れに近い商品などを原価割れの価格で販売する。それは不当販売とはならな
い。ほかの事業者、この場合は近隣にある二店舗への影響がないからだ。だが、集客のために敢え
て原価割れで商品を販売することは不当販売として禁止されている。その線引きは非常に曖昧（あいまい）では
あるが。

「期間は？」

「えっと……たしか、この辺に……あれっ」

凜は資料をバサバサとひっくり返しながら日付を探した。通報のあった一回だけではなく、この
店舗はセールを謳（うた）い毎日のようになにかしら原価割れで商品を販売している可能性があった。

「落ち着け」

「すみませんっ」

そんな風に低い声で言われるほど焦りが募るので、黙っていてほしい。

もちろん言えるはずもないが。

「大量の商品の発注をしている、最初の日を調べてみる」

「は、はい！ すぐに！」

凜は自席に戻り、該当店舗の発注履歴を確認する。

通常の発注とは桁が違ったため、すぐにわかった。

朝川と話すたびに自分はまだまだだということを痛感させられる。補佐として役に立っているかと聞かれると微妙なところだ。

「あ、わかりました！ 半年ほど前からのようです」

「長期間だな。集客のため、意図的に原価割れの価格で商品を販売していたと言える。そんなことをすれば、うちのような体力のある大企業の一人勝ちだ。中小企業が経営するスーパーは手も足も出ないだろう。通報者は、近隣のスーパーのオーナーか」

「はい、おっしゃる通りです」

原価割れで商品を販売することで一時的に損失が出たとしても、集客が見込めれば朝川ホールディングスのような大企業に痛手はない。それどころか利益が出る。

けれど、大企業であるからこそ、清廉潔白でなければならない。与える影響が大きい分、法を遵

守した経営をする。それが結果的にグループや、そこで働く従業員とその家族を守ることに繋がるのだと、朝川は常々言っていた。

彼が次期社長候補だと言われるのも頷ける。

どれだけ経営難でもリストラはしない、というのが朝川ホールディングスの基本理念だ。雇用を守るのはトップに立つ者の責任。だが、口にてきても実行できる人はそうそういない。

「至急、店舗の責任者への通達を。通報者には俺が直接連絡をする」

「わかりました。取引先相談窓口チームに連絡しておきます」

「営業担当にも頼む。俺が店舗に顔を出すから」

「専務がですか？」

「ああ、俺が出向けば、さすがに次はやらないだろう」

たしかに親会社の専務である朝川に睨まれるなんて、店舗の責任者からすれば堪ったものではない。親会社の社員に対して「現場を知らないくせに」と文句を言う店舗責任者もいるが、専務の朝川に難癖をつけてくる可能性は低いはずだ。

「高嶋」

急に呼びかけられて心臓が跳ねる。

「は、はい！」

「会社の固定電話で個人的な用件を話すのは感心しない。プライベートの約束は休憩中に自分のスマホでやれ」

「す、すみません……っ！」

智也との内線での話が聞こえていたのだろう。肩を縮こまらせ、慌てて頭を下げた。

ほんのちよつと話をしていただけではないか、などと言えるわけがない。法務部で作成した社内規定に、従業員の通話や電子メールの私的使用、またインターネットの閲覧に関して厳しく取り締まる旨を記載しているのだから、規定を作った側の凜が破ってはいけない。

朝川に淡々と叱責^{しっせき}されることは珍しくないのだが、仕事以外のことで注意を受けるのは初めてで気分が沈む。自分が悪いとわかっていても、叱責^{しっせき}されるたびに不甲斐なさ^{ふがひなさ}にため息をつきなくなる。「電話の相手が同期だと線引きは難しいだろうがな」

「いいえ。専務のおっしゃる通りです。以後、気をつけます」

凜はもう一度頭を下げて席に戻った。

気持ちを切り替え、不当販売についてのメールを作成する。智也宛てと営業担当宛てのメールを送り終えたのを見計らったように、隣の男性社員が話しかけてきた。

「高嶋さん、専務を相手にしても怯^{ひる}まないなんて強いよね」

「え……まったくそんなことないです」

いったい自分の態度のどこを見てそんな風に思ったのだろうか。一年で少しは慣れてきたとはいえ、朝川に話しかけるのはいまだに緊張する。

「いやいや、うちに異動になる女の子はほとんど全員、最初は専務の冷たい態度に怯^{おび}えて泣くからさ。あの人、性別で態度変えないし。怒鳴^{なみ}ってるわけじゃないのに怖いっしょ？」

「いえ……怖くなんて……」

頷きたいが頷けない。なんとなく朝川の視線を背中に感じたからだ。こんな時「ですよ〜怖いんですう!」と明るく返せたらどんなにいいだろう。そんな風に言いそうな同期の舞の顔がふと頭に浮かんできて、小さく笑みが漏れた。

仕事に集中していると、時刻はあつという間に過ぎていく。

パソコンの時計は十七時三十分。

凜は明日の準備をしてから、パソコンの電源を落とした。スマートフォンをチェックすると、智也からの連絡はまだない。

いつもの店、と言っていたから連絡なしで向かっている可能性もある。凜はバッグを手に立ち上がり、まだ残っている社員に挨拶^{あいさつ}をして化粧室へ向かった。

鏡の中には、姉の蘭とは似ても似つかない地味な女がいる。猫背で痩せていて顔立ちが薄くて地味。そんな自分の容姿を凜は好きになれない。顔を隠すように斜めに下ろした前髪を整えて、鏡からそつと目を逸らす。

蘭は外見も内面も美しい女性だ。そんな蘭に憧れて、あんな風になれたらと、小さい頃から何十回、何百回も思ってきた。

蘭と凜は、かつて私立の中高一貫校に共に通っていた。

凜が中学に入学した時、姉は中学三年生。当時から読者モデルをしていた姉は有名人で、凜はいつだって「あれが高嶋蘭の妹か」そんな風に姉と比べられた。そして「蘭さんと違って地味だね」

「蘭さんと似てないね」そう言われ続けてきた。

彫りが深く華やかな顔立ちの蘭は、いつだって堂々としていて周囲の羨望^{せんぼう}的。性格は明るくサバサバしているが、とても優しく、人見知りで前に出られない凜を庇^{かば}ってくれることが多かった。劣等感はあるても凜が卑^{ひく}屈^{くつ}にならずに済んだのは、ひとえに姉のおかげだろう。

（そういえば……あの時も、二人きりで話があるって呼びだされたんだっけ）

凜には当時、密かに片思いをしている相手がいいた。そこそこの仲のいいクラスメイトだ。彼だけは蘭と自分を比べなかった。自分を見られる人がいると思った。

二人きりで話があるなんて告白かもしれない、自分も好きだと打ち明けてみようか。凜は浮かれて、期待してしまったのだ。だが彼から告げられたのは――

「蘭さんを紹介してくれないかな？」という言葉だった。

そのあとの言葉はよく覚えていないけれど、おそらくほかのみんなと同じように「ずっと蘭さんが好きだった」「付き合おうのは無理でも友人になりたい」そんなところだろう。

彼は蘭と凜を比べなかった。

当然だ、そもそも凜に興味などなかったのだから。凜とよく話していたのは、どうにかして蘭に近づいたためだろう。凜は彼に「聞いてみるね」と返すのが精一杯だった。

彼だけではない。凜を使つて、蘭に近づこうとする男はあとを絶たなかった。蘭に告白して断られ続けた相手に「仕方ないから妹の方でもいいや」と言われたこともある。

だから凜は男性が苦手だ。学生時代は誰も好きになれなかったし、近づいてくる男性が全員、姉

目当てに見えた。

社会人になり、蘭と比べられることはなくなった。その時、ようやく凜はほっとしたのだ。

もちろん蘭を家族として大事に思う気持ちや憧れは変わらない。少しでも憧れの姉に近づきたくて、自慢の妹だと思つてほしくて、努力した。

大企業である朝川ホールディングスの採用が決まった時は嬉しかった。見た目ではなく、今まで真面目にこつこつと積み上げてきたものを認められたような気がしたからだ。

それから少しだけ自分に自信が持てるようになり、自然と智也を好きになれた。

だが男性不信は、いまだに凜の中に根深く残っている。智也に告白しようと思わなかったのも、心のどこかに「彼が自分を好きになるはずがない」という思いがあるからだ。最初から諦めていれば、昔のように傷つくことはない。

（好きな人ができても、思うだけなら傷つかない）

実際に片思いは楽で楽しい。電話が来るだけで浮かれてしまうし、たまに話せるだけでも嬉しい。それ以上を求めなければいいだけだ。

「あ、急がなきゃ」

凜は腕時計に目を落とすと、急いで化粧室を出て、ちょうどタイミングよく来たエレベーターに乗り込んだ。

朝川ホールディングスのビルを出て駅に向かって歩く。高層ビルの間を抜けると商業施設が建ち並ぶ大通りへ出た。人混みをかき分けながら急ぎ足で進んでいくと、ようやく目的地である駅ビル

に到着した。その時、スマートフォンがメッセージの受信を知らせる。

「どうやら智也の方が早く着いたようだ。すでに店内にいるという。」

凜はエレベーターを待つ間、そわそわと腕時計を見つめた。

駅ビル内にあるカフェは、会社帰りの女性やカップルたちで混雑していた。店内をきよろきよろと見回すと、窓際のカウンター席に座る智也を見つける。

「智也、ごめんね！ お待たせ」

舞を含めた三人で会う時はいつもテーブル席のため、彼の隣に座るのは新鮮だ。それに、向かい合わせよりも肩と肩が触れ合いそうな距離にドキドキしてしまう。

「お疲れ様。俺も今来たばかりだよ。そんなに急がなくてよかったのに。呼び出したのはこっちなんだから」

「だって待たせてるって思うと、落ち着かないの」

「ははっ、凜はそうだよな。舞は余裕で三十分とか遅刻するけど」

「舞、遅刻魔だもんね」

椅子に腰かけながらも、頭の中は智也からなにを言われるのかとそればかりだ。

「そうそう。でも会社には遅れないから、頑張って起きてるんだろうな。あ、注文決まった？」

「うん、決まった」

智也が片手を上げて店員を呼ぶ。

「俺はグラスビールとパスタセット。凜は？」

「えっと、サラダセットで飲み物はアイスマルクティーをお願いします」

「ミルクティー好きだよな」

「知ってたの？」

「そりゃ、毎回頼んでれば気づくよ」

「そっか」

智也が自分の好みを知ってくれている。ただそれだけのことに舞い上がってしまう。

話ができるだけでいい。自分の気持ちを知ってほしいとは思わない。だからせめて、ずっとこのまま片思いをさせてほしかった。

（智也が知ってるのは、私の好みだけじゃないし）

彼は舞の好みも熟知していた。好き嫌いの激しい舞は、いつも智也の皿に自分の嫌いなものをどんどんと載せていく。智也は『仕方ないな』と言いながら、舞のわがままを聞いてあげていた。

そういう智也の優しさが凜はとても好きだ。

「そういえば、話って？」

話が止まったタイミングで切りだした。どうしても智也の話が気になって仕方がなかったのだ。

だが、少し早かったらしい。智也の頬が瞬時に赤らんで、気まずそうに目を逸らされる。

「飲み物とか……来てからでいいか？」

「う、うん……もちろん！ ごめんね、なんか気になっちゃって」

「だよなっ。俺の方こそ、ごめん……思わせぶりな言い方して」

微妙な空気が流れて、ふたたび会話が止まってしまった。

どうしよう、なにを話せばいいのだろう。

凜は智也だけでなく、そもそも男性と二人きりの食事は初めてだ。好きな人が隣にいる緊張感でうまく会話が繋げない。

(いつもは、舞が喋^{しゃべ}ってくれるから……)

好きな人との食事にただただ浮かれていられたのは、舞が話題を提供してくれていたからだと今になって気づく。

舞には、自然と周囲を明るくしてくれる魅力がある。人に甘えるのも得意で、入社した当時から上司や先輩に可愛がられていた。目はぱっちり大きく童顔で、柔らかそうなふわふわの髪は小動物のようで愛らしい。

わがままなどところもあるけれど、たまに見せる弱々しい雰囲気^{ひび}に底^ひ護^ご欲^どを刺激されるのか、男性から非常にモテた。

「二人きりって……初めてだよな」

智也も同じことを思っていたのか、落ち着かない様子で頬をかいたり腕を組み直したりしながら、やや上擦った声でそう言った。

「私たちって、舞の話を聞いているばかりだったんだね」

「はっ、舞はなあ、ぼんぼん話が飛ぶから。こつちが必死に考えてなにか返すと、その話もう終わったよ！ とか言うよな」

「別に私、感想求めてないの、ただ聞いてほしいだけなのってね」

「あるある！」

二人で顔を見合わせて笑った。舞の話題で会話が繋がったことに凜は胸を撫で下ろした。

そうしているうちに注文した料理が運ばれてくる。グラスビールとアイスミルクティーで乾杯をして、渴^ういた喉^{のど}を潤^{うる}した。

「そうだ、今日の大丈夫だったか？」

「不当販売？ 大丈夫、通報者には朝川専務が連絡してくれたから」

凜が言うと、智也が安堵したように深く息を吐いた。

「よかった。店舗の責任者は電話では平謝りしてたけど、バレなきやいいって考えの人も中にはいるからなあ」

「専務、今度店舗に顔を出すって言ってたよ」

「うわ、マジか！ ありがたい！ 朝川専務……あの人、やつぱりかっこいいよなあ」

智也は目をきらきらさせて窓の外を見つめた。

朝川が女性にモテるのは言わずもがなだが、なぜか男性からも人望を集めている。凜には朝川のかつこよさがいまいよいよわからない。顔はいいと思うが、それだけだ。美麗な姉を見慣れているからだろうか。

「そう？」

「凜はそういうの興味ないもんなあ。あんな、フツメンにとってはああいう男が憧れなわけよ」

「興味……うん……まあ」

恋愛には興味がある、とは言えなかった。だけど、智也に誰か好きな奴がいるのかと聞かれたら、誤魔化せる自信はない。

智也は朝川に憧れていると言うが、凜にとつては誰よりも隣の彼が特別な存在だ。

「顔だけじゃなくてさ、国立大学法学部卒業！ 三十二歳にして専務取締役だぞ？ しかも実力で専務までのし上がったあとに、実は社長の息子でしただって！ 同じ男から見ても憧れるよ」

朝川が朝川ホールディングスの代表取締役社長の長男であると明かしたのは、実はここ数年のことらしい。

彼の名字や社長と似ている容姿から、社員たちの間でも以前から「もしかして」という空気があったそうだが、誰も聞けなかったのだとか。

「智也だって、この四月から取引先相談窓口チームの主任になったって聞いたよ？ 大躍進でしょ、すごいよ。おめでとう！」

「サンキュー。俺もますます頑張らなきゃな……プロポーズするって決めたんだし」

「え……っ？」

凜は窓の外に向けていた視線を勢いよく真横に走らせた。

まさか、いきなり智也の口から「プロポーズ」という単語が出てくるとは思ってもおらず、動揺のあまり手にしていたアイスミルクティーをごくごくと飲み干す。

「プロポーズ？」

「うん」

まさかと期待が頭をもたげる。いつもは三人なのに、今日に限って話があると、凜だけをこの店に呼び出したのはなぜか。

もしかして智也の口から続けられるのは「結婚を前提にお付き合いをしてください」なのでは。

（いやいや……先走りすぎだよ。ちょっと落ち着かないと）

凜は空になったグラスをテーブルに戻し、智也に向き直る。

「今日の話って……それ？」

「あ、バレた？」

智也は照れくさそうに頬をかいた。

目が合うと、彼の頬はますます赤く染まる。

「一応、主任って役職手当が付くんだよ。ほら、子どもとかできて、俺一人の稼ぎになってもなんとかなるかなって。だから……」

「そこまで考えてるなんてすごいね」

「当たり前だろ」

たしかに未来設計は大事だ。朝川ホールディングスの産休育休制度は充実しているが、妊娠によって女性の稼ぎが減る期間があるのは間違いない。

智也の凜を見る目にはある種の熱がこもっているように見えた。もしかしたら、本当に自分を好きでいてくれたのだろうか。

(まさか……でも)

恋愛に前向きにはなれなかったが、これを機に一步前に進めるかもしれない。

智也の次の言葉を心待ちにしてしまう。

きっと違う、そう思っただけでも期待する心は止められなかった。

「それでさ、相談したかったんだよ。ほら凜、モデルをしてお姉さんがいるだろう？ 女の子が好きそうなレストランとか知ってるかと思って。今度聞いておいてくれないかな。ああ、あとできればジュエリーショップも教えてほしくて」

「レストラン？」

どうして突然レストランに話が飛ぶのかわからず、凜は首を傾げる。

智也や舞には、姉がモデルとして活躍していると話してある。そのため、店選びで蘭を頼るのはわからないでもない。が、なんのために？

「プロポーズはさ、ちゃんとしたんだ」

「そっか」

「プロポーズは一生の思い出だろうし。舞に、喜んでもらいたいんだよ」

「舞に……って……」

愕然と呟く凜に、智也は訝しそうな目を向けてくる。

「本人にプロポーズの計画がバレたら、サプライズが水の泡だろう？ 今日、舞には用事があるって言ってるんだ」

凜は、智也の言葉を頭の中で反芻する。

——結婚するって決めたんだし。

(結婚するって、誰と？)

——本人にプロポーズの計画がバレたら、サプライズが水の泡だろう？

(本人って、誰？)

頭から冷や水を浴びせかけられたような心地がした。あれほど期待してはだめだと自分に言い聞かせていたのに、どうして自分がプロポーズの相手かもしれないなんて思ってしまったのだろう。

(恥ずかしい……っ)

黙り込む凜にようやく気づいたのか、智也が、あ、と声を出し目を瞬かせる。

「そういや凜に言っただけじゃなかったか？ あゝ悪い。舞が、万が一別れたらやりにくくなるからしばらくは内緒に、とか言っただけだった……別れることなんて絶対ないから平気なのに」

智也はそう言ってクスクスと声を立てて笑った。その顔は幸せに満ちていて、冗談でないことが窺える。

別れることなんて絶対ない、そう言い切れるくらい二人は強固な絆で結ばれているのだ。

(何年経っても学ばないなあ……だから、期待しちゃダメなのに……っ)

相手が自分でないのなら、今日呼びだされたのも納得ではないか。サプライズを本人の前でバラすわけがないのだから。

自分は、サプライズ計画の幹事役として頼られただけ。

(なんで……気づかなかったんだろう……)

何度も三人で食事に来ていたのに、二人が恋人関係にあるなんてまったく気がつかなかった。同期として仲がいいと思っていたが、実は自分一人だけが蚊帳の外にいたのだ。

「いつから……付き合ってるの？」

「舞が受付からうちのチームに来てからだから、ちょうど一年くらいになるな」

一年も前から。

欲をかくからこうなる。ずっと片思いでいいのではなかったのか。期待していた自分が恥ずかしくて、消えてしまいたくなる。

過去の失敗から学んだはずだ。片思いで十分だと思えば、それ以上を求めてはいけない。

最初から決定していた失恋にもかかわらず、胸が苦しくて、遣る瀬なかった。

「そっか……一年も。プロポーズ、喜んでくれるといいね」

「サンキュ」

それだけ言うのが精一杯だった。

声が震えていなかっただろうか。うまく言えただろうか。

(舞も智也も大事な友達なんだから……ちゃんと二人を祝わないと)

一生思い出に残るプロポーズをしたい、智也にとつて舞はそういう相手。

舞を羨んでしまう気持ちはあっても、二人には幸せになってほしい。二人が結婚すれば、きっと

この想いもすぐに消えるはずだ。

けれど。

じわりと目に涙が滲む。

今泣いてはいけない、そう思えば思うほど胸が締めつけられるように痛んだ。

「凜？　どうかした？」

急に黙り込んだ凜を心配してくれたのか、智也が隣から顔を覗き込んでくる。凜は慌てて手のひらで口元を押さえ、咽せたふりをした。

「……っ、けほ……ちよつと、水が、気管に入っちゃって……っ」

「大丈夫か？」

智也は案じるように凜の背中をぼんぼんと叩いてくれる。

赤くなった目をそつと擦り、平気だと頷く。

胸に手を当てながら深呼吸をしていると、徐々に目に浮かんだ涙が乾いてくる。

二人にこの気持ちを知られるわけにはいかない。だから、平気な顔をしなければ。友人である二人に気を遣われるのも、可哀想だと思われるのもいやだ。

それは昔、片思い相手に「蘭さんを紹介してくれないかな」と言われた時と同様の、ちっぽけな自分の矜持。

「ありがとう……もう大丈夫」

「飲み物頼む？」

「ううん、平気。さっきの話、お姉ちゃんに聞いておくね。頑張つて、智也」

必死に笑顔を取り繕ったものの、笑えていたかはわからない。

でも、智也に気づいている様子はなから、おそらく不自然ではなかったはずだ。

「こちらこそ相談に乗ってくれてありがとな。お姉さんによろしく」

これ以上、智也から舞の話聞くのは辛くて、残っていたサラダを急いで食べた。

智也は自分から話を振るタイプではなく、凜も同じだ。それきり会話が止まり、かちゃかちゃとフォークを動かす音だけが響く。早く店を出て一人になりたかった。

「そろそろ行こうか」

「うん、だね」

凜の皿が空になったタイミングでどちらからともなく帰ろうという雰囲気になり、席を立った。舞がいれば二時間でも三時間でも話は止まらないのに、凜と智也ではたった一時間が限界なのだ。

同期として仲良くなれたのも舞がいたから。

そんなことにも気づけなかった。

悲しくて、情けなくて、しんどい。

重い身体を引きずるように、一人暮らしをしているマンションまでの道を歩いていると、バッグの中に入れたスマートフォンが振動し着信を知らせる。

着信相手の名前を見て、凜は身体を強張らせた。

「舞……」

今の自分が、舞と落ち着いて話せるとは思えない。気がつかなかったことにして、このまま出な

いでいようか。スマートフォンを手にしたまま考える。

そのうち着信がぷつりと途切れて、無意識に深く息を吐く。

だが、すぐにまたスマートフォンが振動した。

着信を無視したら、折り返さなければ舞に不審に思われる。ならいっそ、今話してしまった方がいいのではないか。凜は重苦しいため息をつきながら、スマートフォンをタップした。

「はい」

『あ、何度もごめんね。電車だった？』

「うん、今、降りたから。どうしたの？」

思っていたよりもずっと普通の声を出せたことにほっとする。電話なら、落ち込んでいるのも、涙の痕があるのも、気づかれずに済む。

『ん〜あのね……もしかして今日、いつもの店で智也と一緒にだった？』

「え……」

どう返すべきだろう。

プロポーズの件は当然内緒にしておいてほしいと頼まれている。だが舞は「もしかして」と言いながら、凜と智也が二人でいたと確信しているような口ぶりで話し始めた。

『ご飯行こうって言ったら用事があるって言うから。なにか隠してる感じがして、おかしいなあって思ったの。智也に電話したら、まだ電車だったし』

「あ、そっか。でも、そんな大した話は」

『あのね……ごめん、凜。ずっと黙ってたけど、私……智也が好きなの。付き合ってるの』
「うん、そうなんだ」

凜は知っていると知らないとも言えなかった。

ただ、なぜ「ごめん」と謝られたのかわからず困惑する。

『私ね、凜が、智也のこと好きだって知ってた』

「え……」

あまりの衝撃に、息が止まりそうになった。

金縛りに遭ったかのように動けなくなる。

（気づいて、たの……？ どうして）

気づかれていたなんて思わなかった。いつたいつから舞は知っていたのか。

知っていて、どうしてなにも言わなかったのだろう。

違う、言えるはずがない。凜は誰にも智也への想いを打ち明けていないのだから。舞は、知らないふりをするしかなかったのだ。

『それなのに……好きになっちゃったの。いっぱい我慢して、凜の好きな人なんだから奪うなんてだめってわかったのに……どうしても諦められなくて、好きになっちゃった、ごめんなさい』

さっと血の気が引いていく。地面がぐらぐらと揺れている気がして、ともに立っていられず、近くの塀に寄りかかった。

「いつから……知ってたの？」

声は情けなく震えていた。

『何年も前。三人で会ってても、凜が智也ばかり見てるからすぐ気づいた。でも凜ってそういう恋愛話しないでしょ？ だから最初は陰ながら応援したくて、智也と二人で会ったの。さりげなく凜の話題を出したり……智也に好きな人がいないのか聞いたりして。智也も楽しそうだったし、うまくいくかもって思った。でもしばらくしてから、智也に告白されて……断れなかった。断らなきゃって思ったのに、私も智也が好きだって気づいちゃったの』

「そう、なんだ」

『本当に、ごめんね』

「ううん……謝らないで。舞が悪いわけじゃないんだから」

ただ好き合っている二人が恋人になっただけの話。

凜は舞のライバルにさえなっていない。この気持ちを智也どころか友人である舞にさえ話してはいなかった。むしろ申し訳ないと舞に思わせてしまった自分が情けない。

『あのね、凜ちゃん』

舞が凜を「凜ちゃん」と呼ぶ時は甘えたい時だ。わがままだとわかっていて、なにかを頼みたい時。いつもならなんとも思わないその言葉が今はひどく重い。なにを頼まれるのだろうと身構えてしまう自分がいた。

「うん……なに？」

『智也は……私のことすごく好きみたいで……申し訳ないんだけど、凜ちゃんには恋愛感情がない』

と思うの。だからね、今さらだけど、智也のこと私がもらってもいい?」

智也が凜をなんとも思っていないのは明白だ。友人どころか、舞がいなければ会話すら成り立たない関係だ。だが、わかっていても突き付けられた「恋愛感情がない」という事実が気持ちに塞ぐ。「もらうって。智也は物じゃないんだから……それに、もう二人は付き合ってるんでしょ?」

『だって、凜から好きな人を奪ったのは本当のことだよ。傷つけるのがわかってたから言えなかったなんて、言い訳だもん。凜が智也を好きなこと、私は知ってたのに』

電話の向こうからぐすと涙まじりの声が聞こえてくる。

凜が気持ちを隠していたから、舞は智也が自分の恋人だと言いたくても言えなかったのだ。友人として、これ以上舞を困らせてはいけない。

「気を遣わせてごめんね、舞。私は大丈夫だから。二人の幸せを願ってるよ」

大丈夫ではなかったけれど、ほかになにを言えただろう。

私だって好きだった、二人が付き合うのはいやだ、そんな風に言えるくらいなら、最初から告白だってできている。なにも望まないと自分で決めたのだ。

『ありがとう。ねえ……凜ちゃん』

「うん?」

『私さ、頑張って凜ちゃんが好きになれる人探すから』

『探すって?』

『合コン! 合コンしよう! ね?』

舞の底抜けに明るい声が、今の凜には辛い。

しばらくはそんな気分になれない、と言ったら舞はまた気にするだろう。凜はため息を呑み込み「そうだね」とだけ返事をした。

『ねえ凜。今度はさ、好きな人がきたらちゃんと自分から告白しなきゃだめだよ。自分から動かなきゃ気持ちも伝わらないよ……ってこんなこと、私に言われたくないと思うんだけどさ』

「ううん、ありがとう。でも恋愛って、私にはハードルが高くて」

『恋愛にハードルなんてないよ。別に顔だけがすべてじゃないんだからさ』

顔だけがすべてではない。それは凜にもわかっている。

ただ凜自身が恋愛に積極的になれないだけで。

きちんと仕事をして金銭的にもそれなりに余裕が出てきた。愛すべき家族もいる。それだけではだめなのだろうか。誰かをひっそりと好きになるだけでそれ以上は望まない。そんな人生ではだめなのだろうか。

『あつ! この間さ、凜のお姉さん雑誌で見たよ。最近テレビにも出てるよね? そりゃあ、あんな美人のお姉さんがいたら自信がなくなっちゃうのはわかるけどさ。ほら、凜は勉強とか得意だし真面目だしさ……そういうの見てくれる人もいると思う』

久しぶりに言われたな、と凜は苦笑する。

昔はよく言われたものだ。「あんなお姉ちゃんがいたら嬉しいけど、隣には立ちたくないよね」「姉妹で比べられるとか可哀想」「顔だけじゃないよ、凜には凜のいいところがあるよ」懐かしさと

共に痛みまで思いだして、凜は胸を押さえた。

昔のことなど、ここ最近では思いだしもしなかったのに。社会人になり、同僚や先輩ともそれなりにうまく付き合えていた。蘭と自分を比べる人はいなかったから。

(憧れはあっても、お姉ちゃんや舞を妬んで……卑屈になりたくない)

姉も友人も大事だ。悪感情を抱けば、今度こそ自分を嫌いになってしまいそうで、凜はふつふつと湧き上がる嫉妬心に蓋をする。

必死に声を殺して、震えそうになる肩を己の手で抱き締めた。

すると電話越しにもう一度『凜ちゃん』と呼ぶ声が聞こえた。

「ん？」

『私たち、また友達に戻る？』

「……うん、もちろんだよ」

凜は苦しい気持ちを胸の内へぎゅうぎゅうと押し込んで、精一杯明るく言った。舞は安心したように、笑い声を漏らす。

『よかったあ。凜に絶交って言われたらどうしようかと思った。すごくすごく緊張してたから、安心した』

「絶交なんて、思っていないよ」

『うん、ありがとう。じゃあまた三人でご飯行こうね。智也にも言っておくから』
澆刺とした舞の声が、凜の胸に重くのしかかる。

二人とは今まで通り友人でいたい。だが自分は、これから夫婦になる二人の前に、どんな顔を示せばいいのだろう。舞に気持ちを知られているのに「おめでとう」と笑って言えるのか。

いや、言わなければならない。二人の幸せを願っていると云ったのは、凜なのだから。すぐに返事ができなかったのを不審に思ったのか、舞が不安そうな声で聞いてくる。

『凜？ やっぱり、いや？』

「ううん！ ごめん、ちょうど家に着いたところだったから。またご飯行こうね」

電話を切ったあと、重い身体を引きずるようにして家に帰った。

なにもする気が起きず、服も脱がずにベッドに横になる。

頭の中を埋め尽くす、智也と舞の姿。二人は今頃、仲良く電話をしているのかもしれない。智也が自分に興味を持ってくれていると勘違いするなんて、なんて滑稽なのだろう。

「う……っ」

目尻から流れ落ちた涙が枕に吸い込まれていく。ぼろぼろとこぼれる涙は、拭いても拭いてもなかなか止まらない。

三人で食事に行った時のことを思い出すと、羞恥で消えなくなる。もっと早く気づいていればこんなに苦しまずに済んだのに。

友達でいたい。けれど二人に会ったら、自分の恥ずかしさも思いだしてしまいそうで辛い。

目を瞑って眠ってしまおうと思っても、頭の中に浮かんだ映像はなくならない。スライドショーのように六年分の思い出が幾度となく繰り返し流れていく。

泣きすぎて目が痛くなって、頬がカピカピに乾いた頃、ようやく凜は眠りに落ちた。

「ん……？」

立て続けに響くなにかの音で、急激に凜の意識が浮上する。

部屋中に響く音はインターホンの音だった。こんなに朝っぱらからいたい誰だろう。

凜は額に触れながら、のそのそと起き上がった。次の瞬間、頭に鈍痛が走る。発熱した時のように全身が重い。

「あ……化粧したまま寝ちゃったんだ」

泣きすぎた臉は腫れぼったいし、ぱりぱりと顔が引き攣^{まぶた}っていて不快だ。凜がベッドからよろよろと下りると、何度目かのインターホンが鳴らされた。

「……はい」

凜はインターホン越しに応答する。どうせ宅配便かなにかだろうと思っていると、男性の焦ったような声が聞こえてきた。

『高嶋っ、いるのか？ 大丈夫か？』

凜が住んでいるマンションは六畳が二間の1LDKだ。ドアの前で大声を出されると部屋の中まで丸聞こえである。

「あのー」

どちら様ですか、と問いかける前に向こうから応答があった。

『朝川だ』

「あ、朝川……専務っ!？」

ひえつと跳び上がりそうになりながら、凜は部屋の中がやたらと明るいことによく気づいた。そもそもどうして自分はこんなにゆっくりしているのか。

今日は平日、仕事のはずだ。転びそうになりながらも慌てて玄関に向かいつつ時計を見ると、短針はすでに十二を指していた。

(十二時って……嘘っ!)

慌てて玄関のドアを開けると、そこには眉をぎゅつと寄せた朝川専務の姿があった。

「も、申し訳ございません……っ！ あ、私、無断欠勤を……」

「何事もなくてとりあえずよかった」

頭が痛いのも忘れて平謝りするが、玄関先で仁王^{にむす}立ちした朝川はほっとしたようにそう返してきた。てつきり怒っているのかと思っていたが、どうやら心配してくれていたらしい。

「あの、どうして専務が？」

「朝から何度電話しても出なかったから、部屋で倒れている可能性も考えて、上司である俺が来た。熱でもあるのか？ 顔も目も真っ赤だな」

「あ、いえ……あの、その」

「どうした？」

心配してわざわざ来てくれた上司に「失恋して、泣きすぎて眠れず寝坊しました」とはとても言

えず、凜は口ごもる。

このまま嘘をついて熱があると言ってしまうか。失恋で落ち込んでいる時に、朝川に怒られてさらなるダメーじを食らいたくはない。そんな浅はかな考えが脳裏を過り、凜は自分よりも頭一つ分高い朝川に目を向けた。

「あの……実は」

「それとも、なにかあったのか？ 目が腫れてるし、涙の痕がある」

普段の冷やかな物言いとは違い、労るような声だ。凜は開こうとしていた口を閉じて、唇を噛みしめた。たとえ怒られたとしても、嘘はつくべきではない。

「本当に……申し訳ありません。明日は絶対に休みませんから」

「謝らせたいわけじゃない。そんな弱り切った顔で頭を下げられたら、わかったって言って帰ることもできないだろうが」

朝川はとても機嫌がいいとは言えない表情でガシガシと頭をかいた。凜がなにも話そうとしないから苛立っているのかもしれない。

仕事であれば切り替えができただろう。しかし今の凜は、頭痛に加えて昨夜のショックがまだ抜けきれていなかった。さらには上司にまで迷惑をかけた自分が不甲斐なくて、悔しくて、泣きたくないのに涙が溢れそうになる。

「とりあえず今は俺を上司だと思わなくていい。仕事のことも忘れろ」

「でも」

上司だと思わなくていいと言われても、上司は上司。明日も顔を合わせるのだ。

失恋で会社を無断欠勤したのだとわかったら、きっと朝川は失望するだろう。異動して一年、自分なりに頑張ってきたつもりだが、それがすべて水の泡になる可能性だってある。

朝川は部下を怒鳴るようなことはしない。けれど呆れはするはずだ。ただでさえ仕事に厳しい朝川に呆れられたら、この先の仕事がいにくくなるかもしれない。考えれば考えるほど正直に話すのは躊躇われた。

「今日、俺がここに来たことは法務部の全員が知ってる。事情を話してくれないと、うまく誤魔化してやることもできない」

「はい」

「怒っているわけじゃない。事情を聞かせてほしいと言ってるんだ」

いつもと同じ淡々とした口調ではあったが、朝川の声にはどこことなく案じるような響きが含まれていた。凜は、恐る恐る顔を上げて向かいに立つ男を見つめる。

失望されようと呆れられようと、もう話すしかない。

凜が口を開きかけたその時、隣の部屋のドアが開き、年配の女性が出てきた。背の高い朝川をちらちら横目に見ると、気になりますと言いたげに通り過ぎていく。

「すみません、玄関で。とりあえず……中に」

心配してわざわざ来てくれた上司をいつまでも玄関に立たせておくことはできない。凜は玄関のドアを大きく開き、朝川を中に招いた。

「おい……それ、大丈夫か？」

「はい？」

「ああ、いや……なんでもない。お邪魔します」

朝川は片手で額を覆い、ため息をついた。すでに呆れている様子だ。面倒をかける部下で申し訳ないと、凜はますます肩を落とす。

「どうぞ、かけてください」

「ああ」

朝川をリビングに置いてあるローテーブルの前に案内し、クッションに座ってもらう。自分一人で暮らす分には狭さなどまったく感じなかったが、一八〇センチを超える長身の朝川が部屋にいと途端に窮屈に感じた。

凜はキッチンに立ち、紅茶を淹れるためにケトルで湯を沸かす。棚から出したティーポットとカップのセットは姉からのもらい物だ。蘭は凜の部屋に来るたびにあれやこれやと弄り模様替えをするため、部屋の中はほとんど姉の趣味で統一されている。

凜にとっては悩まなくていいうえに、楽なのでいろいろと姉任せにしまっていた。自分好みで作ったスペースは本棚の一角くらいだろうか。

（そういえば……私、寝起きだ）

鏡を見ていないが、髪はボサボサだろうし化粧は完全に崩れているはず。朝川に背を向けたタイミングで髪をさつと整えた。昨日から着ているシャツはしわだらけだが、これはもうどうにもなら

ない。

朝川に背を向けている間に、気持ちを静めて冷静になろう。忙しい人にわざわざ家まで来させたのだ、きちんと説明しなければ。

凜は、ぽこぽこ音を立てるケトルから沸騰した湯をティーポットに注ぎ入れて、テーブルへと運んだ。

* * *

朝川は部屋に足を踏み入れると、凜の案内でダイニングにあるローテーブルの前に腰を下ろした。リビングダイニングとキッチンは仕切られておらず、二部屋の造りのようだ。

生真面目な彼女らしい、掃除が行き届いた清潔感のある部屋だ。本棚には法務関係の本が並べられ、普段から手に取っているのか読み込まれているのがわかる。

リビングの中央にあるのは大理石柄のシンプルなローテーブル。全体的に白を基調としたデザインで統一されているが、ラグやクッションは可愛い柄だ。派手さはないもののセンスの高さが伺える。楚々とした印象の彼女によく合っているように思えた。

（前髪で顔が隠れているから地味な印象はあるが、実はけっこう綺麗な顔をしてるんだよな）

朝川はいつも座ったまま凜の話を聞いている。下からだと彼女の顔がよく見えた。

目立つタイプではないだろうが、白くきめ細かい肌をしているし、アーモンド型のぱっちりした

二重の目は長いまつげで縁取られている。

腰も細く高い位置にあり、いつも肩を丸めているから自信なさげな印象ばかりが目につくが、きちんと整えればかなりスタイルのいい美人になるように思えた。

キッチンに立つ彼女は、昨日と同じ格好をしていた。ブラウスやスカートはしわだらけだ。朝、着替えたというわけではないだろう。

いつもきつちりと結ばれている髪は下ろされていて、寝癖なのか毛先が撥ねていた。

朝川に背を向けてお茶の準備をしている背中からは、ある種の緊張が伝わってくる。

このあと叱られるのではと身構えているに違いない。

大した理由もなく無断欠勤したのであれば叱るつもりだったのだが、涙に濡れ、真っ赤に腫れた凍の顔を見れば、なにかあったのは明らかで。さすがに理由も聞かずに叱責はできなかった。

「すみません。お待たせしました。紅茶でいいですか？」

趣味のいいティーカップがテーブルに置かれる。

凍の分は牛乳を足したミルクティーのようだ。

「悪いな。そんなに気を遣わなくていいから、とりあえず座れ」

「は、はい」

朝川が言うのと、凍は少し距離を空けて斜め向かいに座った。自分の部屋なのに正座で身を竦ませている様子は、見ていて可哀想になるほどだ。

朝川は、彼女を部下として気に入っていた。

仕事に関していえば、絵に描いたように真面目で、学ぶ楽しさを知っていて貪欲。接してわかるのは、教えれば教えただけ吸収するタイプだということ。意欲のある部下に対して評価が高くなるのは当然だ。ただ、そのせいで指導がより厳しくなっているのも否めない。

高圧的に接しているつもりはなくとも、凍が自分を苦手としているのは感じていた。

他人——特に女性に対して冷たい自覚はある。物言いは柔らかいとは言いがたく、誰ともプライベートな会話はいっさいしない。だから、冷たい、怖いと思われるのには慣れている。

朝川は、自分がどれだけ女性の目を引くか理解している。故に、下手に優しくして勘違いされるのが面倒で、期待を持たせるような振る舞いはしないと決めていた。

女性の告白を断ると、どうしてもだめか、好きな人がいるのかと執拗に問い詰められる。

こちらが『好きな相手がいないければ君と付き合わなきゃいけないのか』そう聞き返すと『ひどい』と泣く。女の涙が一種の武器であることはよくわかっていた。女性に泣かれると男はなにもできなくなる。本気で勘弁してほしい。

ほかにも理由はあるが、とにかく朝川は女の涙というものを信用していなかった。

だから玄関先で凍の泣き顔を見た時に感じたのは、苛立ちだった。一晚中泣きましたと言わんばかりの顔、見てわかるほどにぼろぼろの格好。

自分は傷ついている、慰めてほしいと言われているようで、うんざりした。だが、一応上司として心配していたのも本当だ。

彼女が受付にいた頃から、その勤務評価はかなりいい。常に始業五分前には席に着いているとい

う生真面目さ。出会った頃と変わらない優秀さ。朝川を相手に女を武器にしてこないとこも好ましく思っていた。

多少強く注意をしてもへこたれない根性があるし、必死に学び取ろうという姿勢もある。普段の彼女はプライベートの問題を仕事に持ち込むタイプではないはずだ。

朝川の斜め向かいに座った凜が、恐る恐る顔を上げた。先ほどの話の続きをどう切りだそうか迷っているのだろう。さつさと話を終わらせるため、こちらから切りだした。

「昨夜……帰る前まではいつもと変わらなかったな。会社を出てから今朝までの間に、なにかあったのか？」

朝川の問いに、凜がびくりと肩を揺らし目を泳がせる。

昨日の帰りまでは特になにもなかったことは間違いない。むしろどこか浮かれている様子だった。そこでふと、昨日の午前中、彼女が取引先相談窓口チームからの内線で個人的な用件を話していたのを思いだす。おそらく食事の約束かなにかだろう。

（その相手となにかあったのか？）

仕事中の彼女を知っているだけに、多少は同情心が芽生える。

本当に同一人物かと疑いたくなるほど今日の凜は弱り切っていた。腫れて真っ赤になった目元、潤んだ瞳、おそらく何度も擦ってしまったのか、目の下の薄い皮膚まで赤くなってしまうている。

「本当に……くだらないこと、なんです」

「お前にとってはくだらないんだろ？ だから、そんなに目が腫れるまで泣いたし、朝いつも

の時間に起きられなかった」

朝川の言葉が正解だともいうように、凜の瞳が揺れる。目の縁には涙が溜まり、瞬きをすると落ちてしまいうさだ。

もともとほっそりしている肩がより小さく見える。思わず守ってやりたくなるほどに。

（守ってやるって……なんだよ。そういう弱い女は、嫌いだったはずだろう）

泣いた女を慰める。そんなことは面倒でしかない。

勘違いされセクハラなどと言われたら、専務という立場だって危うくなる。それを考えると心底嫌気がさす。

「さぼったとか、思わないんですか？」

凜が驚きつつも掠れた声で口を開いた。自分でも声がおかしいと思ったのか、ミルクティーを一口含む。同じタイミングで朝川もティーカップを傾けた。

「お前が真面目に仕事に取り組んでるのはわかっている。普段からさぼるような奴だったら、わざわざ心配して見に来ない。うちの部署の連中が、電話にも出ないなんておかしいから見に行った方がいいって言ったんだぞ。それだけ信用されていることがわからないのか？」

その言葉が胸を突いたのか、凜の目がさらに潤んでくる。かけた言葉に嘘はない。部下が彼女を心配するのは、それだけの信用があるからだ。

ただ、慰めて泣かれると、思いつきため息をつきなくなる。

「あの、実は昨夜……」

凜は観念した様子で昨夜の出来事をぽつぽつと話しだした。

どうやら彼女は、長く片思いしていた相手に失恋したらしい。片思いの相手にはすでに結婚を考えている恋人がいたのに、話の流れでそれを自分だと勘違いしてしまった。

たったそれだけのこと。

自分にも過去それなりに恋人はいた。だが、たかが恋愛に心を揺らす人の気持ちがまったくわからない。朝川は恋愛感情で感極まって泣く女が一番嫌いだった。泣いている女の相手をするくらいなら、さっさと別れて次に行きたいと思うくらいには。

いつもの朝川なら「失恋ごときで仕事をさぼるな」と言っていただろう。実際、同じ部署の女性から告白された翌日、そう言った覚えがある。

上司として注意の一つはするべきところなのに、見てわかるほどに憔悴^{しょうすい}し、無断欠勤をしてしまった自分自身を責めている彼女への苦言が出てこなかった。自分にも一応、人に同情する気持ちがあつたらしい。

「勝手に期待して舞い上がっちゃって……それがすごく恥ずかしくて」

なにかを思い出したのか、ますます凜の目が潤^{うる}み、ついに涙が頬を流れ落ちた。切なげに顔を歪^{ゆが}めて誰かを思っ泣く凜の姿を見て、朝川は息を呑む。

どうしてだろう。

泣いている女の顔を綺麗だなんて、今まで思ったことはなかったのに。

凜は泣いてしまったことを恥じらうように、手の甲で頬を擦りながら俯^{うつむ}いてしまう。肩は震えて

いるのに、泣き声は聞こえない。

我慢せず思うままに泣いた方が楽だろうに、必死にこらえている。その姿がいじらしくて、綺麗で、なぜか泣かせてやりたい”と感じた。

(泣かせたいって……おかしいだろう)

泣いている女を見て喜ぶような、そんなおかしな性癖はないはずだ。泣いて同情を貰うような女には嫌悪感すらある。

ただ、一瞬だけ見た凜の表情が、頭の中にこびりついて離れない。

俯^{うつむ}いている顔を上げて、声を上げて泣いてほしい。

こくりと喉が鳴り、細い身体をかき抱^{いだ}きたくなる衝動を必死に抑え込む。だが、凜を女性として意識することは止められなかった。

(泣いている顔が、見たい)

部下に手を出すなんて面倒でしかない。部下として気に入っていた、ただそれだけのはずなのに。すでに下心込みで凜を見ている自分がいた。

「だめだ。あまり擦るな」

気づいた時には声を発し、凜の手を取っていた。

涙に濡れた頬をそつと撫でて上向かせると、驚きに目を見開いた凜の顔がある。そうだ、確かめるだけ。もう一度だけ彼女の顔を見て、やはり自分の感情は間違이었다と決着をつければいい。

そう思ったのに。

目を潤ませ朝川を見上げる凜の顔は、とても綺麗とは言いがたい。それなのに目が離せなかった。不覚にも見蕩れてしまったのだ。その時の衝撃といったらなかった。

「朝川専務……？」

すでに引き返せない。

無事かどうかを確認したら、明日は来いと言って帰るつもりだったが、抗いがたい欲求が次から次へと湧きでてくる。触れたい、撫でたい、もっと泣かせてやりたい。

彼女の涙の痕が残った頬や潤んだ目を見ていると、覚えのある身体の熱に蝕まれそうになる。

上司として案じる気持ちよりよほど強い欲求に支配されそうだ。凜を慰めて、抱き締めたい。自分だけの女にしたい。

(……もともと雄には狩猟本能が備わってる、なんて言うが)

彼女が自分に興味がないとわかっているからか、ほかの男ではなく自分を見てほしい。こちらを振り向かせたい。そんな欲求に駆られる。

たやすく手に入りそうにないからなのか、それとも単純に溜まっていてやりたいだけなのか。ただ、強く“欲しい”と感じた。

「かなり腫れてるから。これ以上擦らない方がいい」

ほかの男を想って泣くくらいなら、自分を想って泣けばいい。

自分ならその男を忘れさせてやるのに。傲慢な考えだとわかっていても、朝川は一度欲したものをそう簡単に諦められる性分ではなかった。

「すみませ……っ、私、顔……ひどいですよね」

凜は無理に笑おうとして失敗したような表情で朝川を見る。

「いや、綺麗だよ」

弱り切っているのに気丈に振る舞おうとする凜は、儚げで綺麗だった。

凜は驚いた顔をするものの、朝川の言葉をお世辞だと思ったのか、瞬きを一つして続きを話した。

「どうして……気づかなかったんだろう、って」

「気づかなかったことが、ショックだったのか？」

朝川が聞くと、凜はそれを否定して、自分を落ち着かせるように深く息を吐いた。

「それも、ありますけど……舞が……友人が、私の気持ちに気づいてたって聞いて」

もともと仲が良かったらしく、三人で食事に行っていたという。その二人が付き合い始めても、

関係は変わらなかったそうだ。

朝川は引つかかりを覚えて眉を寄せる。考え事をする時に、厳つい顔をしてしまうのは癖のようなものだった。

「気づいてたのか？ 相手の女が？」

朝川が聞き返すと、凜は頷いた。

「はい、昨日……電話があつて」

「その女は、お前の気持ちを知っていたのに、恋人との食事に誘っていたのか？」

まるで見せつけるみたいにな？」

それは友人の行動としていかなものか。

なぜ凜が不思議に思わないのか、朝川には疑問だった。

「舞はたぶん、私の気持ちを知ってたから気を遣ってくれたんだと思います。最初は、告白もできない私のために協力してくれるつもりだったみたいで……智也に告白されて、断ろうとしたけど好きになっちゃったって、昨日電話がありました、ごめんねって。舞が謝ることじゃないのに」

それが本当だとしたら、凜はただ当てつけられただけではないか。

朝川には、舞というその女の行動がわざとらしく思える。

どうして凜は気づかないのか。ごめんねと言葉をかけ下手に出ながらも、貶められているのだと。いかにその男に自分が愛されているか、ただ知らしめたかっただけではないか。

現に一年もの間、二人は隠れて付き合っていたと聞く。男の方に隠すつもりはなかったとしても、女にはなにか思惑があるような気がしてならなかった。

自分が偏った見方をしているだけかもしれないが、世の中にはそういうしたたかな女が一定数いると朝川は知っている。

「いい性格してるな、その女」

「え……？」

ため息まじりに呟いた言葉は凜の耳に届かなかつたらしい。気づいていないならそれでいい。憔悴^{しやうすい}しきつたところに追い打ちをかける必要はないだろう。

「なんでもない。で、このあと、お前は どうしたいんだ？」

「笑って……二人におめでとうって言いたい、です。いえ……言わなきゃ。それに舞が、私に合う人を探すからって張り切っていましたし」

「お前はそれでいいのか？」

凜はよくわからなかったのか、首を傾げながらも小さく頷いた。

「私のせいで二人がギクシャクするのはいやですし……舞には知られちゃいましたけど、会社で顔を合わせますし、やっぱり、友人ではいたないので」

凜は涙に濡れた目を上向けながら、儂^{はかな}げに微笑んだ。

自分を傷つける相手を友人とは言わないだろう。朝川はもどかしく思いながら言葉を呑み込んだ。二人に対して恨めしい気持ちを抱^{いだ}いていてもおかしくない。だが彼女は、それよりも友人関係にヒビが入るのを恐れている。

その証拠に、凜は片思いをしていた男にも、裏切っていた女にも微塵^{みじん}の怒りも感じていない。切なそうな表情が痛々しかった。こんなに弱り切った姿を男に見せる意味を、彼女はわかつているのだろうか。わかつていないに違いない。

いくら直属の上司とはいえ、一人暮らしの部屋で男と二人きり。これが朝川を誘惑するための手だつたら感服するが、おそろく違う。朝川に取り入ろうとするようなあざとさが凜からはまったく感じられない。

朝川がこの状況においてなにかするとは少しも考えていない。上司としては信用されているのだ